昭和42年卒　佐々木　諭

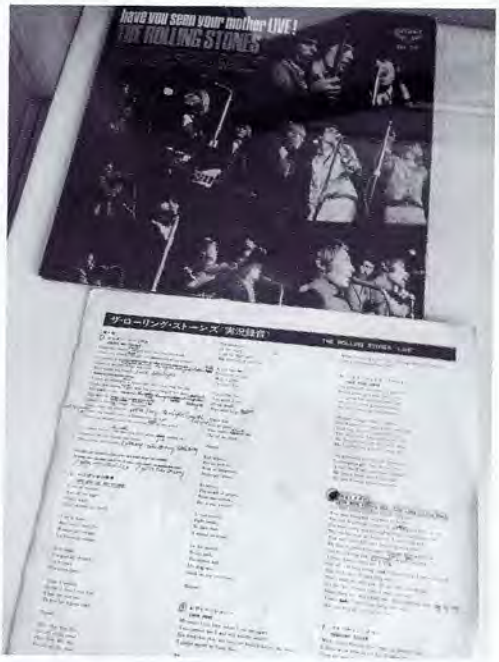
平成25年12月30日、突然亡くなった大瀧詠一氏。その2日前、釜石市にふるさと納税をしています。在校生の皆さんには、もうあまりなじみのない名前かも知れません。大瀧氏の旧姓は「菊池」。今から49年も前の高校2年と3年の昭和40年度、41年度の2年間、釜石南高校で学び、卒業しています。高校1年生の時は、花巻北高校に在学しています。

さて、彼は、およそ45年前の一九七〇（昭和45）年、当時物議を醸した日本語で歌うロック・グループ「はっぴぃえんど」に参加し、サイドギターを担当します。今では普通にロックを日本語で唱っていますが、当時は画期的なことだったのです。

彼は様々な音楽に挑戦します。ロックはもちろん、女性のバックコーラス、アカペラ、歌謡曲や音頭、コマーシャルソング等を駆使し、目覚ましい活躍をします。伝説的なアルバム「ロング・バケーション」を始め、多くのアルバムを世に送り出したほか、松田聖子や森進一、小林旭、薬師丸ひろ子など有名な歌手へ楽曲を提供し、ヒット曲となった曲も多くあります。このほか、音楽評論やプロデューサーなどで幅広く活動しました。

前置きはこれ位にして、高校当時の彼について知る限りで書いてみます。

彼と初めて話したのは、花巻から転入して間もなくの頃、応援歌練習を嫌って、化学部の部室で雑談していました。発売されて数カ月目のビートルズのアルバムの曲について友人と話していると、大のポップスファンの彼は見逃す筈はなく、なんだかんだ



高校時代に、大瀧氏から佐々木さんが譲り受けたというローリング・ストーンズのレコード。歌詞カードには、英詞の誤りを自ら正した直筆の書き込みが見られる。

た私は、彼と意気投合するのにそう時間は要りませんでした。

彼は、中学生の頃からエルビス・プレスリーの大ファンで、ポップスにも狂っていて青森県三沢基地から放送される短波放送の電波を拾うため、アパートの屋上を銅線でグルグル巻きにしていました。

二人でバンドをやろうとしたきっかけは、釜石に来た「田辺昭知とスパイダース」の公演。「夕陽が泣いている」を出したばかりでしたが、ビートルズの楽曲を演奏したのです。これなら俺達にも出来る、と思いました。

ただ、当時は「エレキ」といえば不良の集まりと評価される時代で、ビートルズなどはもってのほか、聞いてはならない音楽の頂点でした。

彼の母親は養護の先生。「お前達の音楽がそんなにいいなら、体の不自由な子ども達にも聞かせてあげなさい。」と一喝され、楽器を乗せたリヤカーを引っ張って施設訪問をしたものです。楽器に触れた子ども達の目の輝きは、今でも鮮明に覚えています。

二人で「ザ・スプレンダーズ」と名乗り、ビートルズを歌っていたものです。ビートルズの映画が来ようものなら、全曲の歌詞やパートを練習して、大声で歌いに行ったものです。

予餞会は、インストルメンタル、ビートルズ、ブルーコメッツなどを演奏したり歌ったり。圧巻は彼が唱うビートルズの「イエスタデイ」。やんやの拍手を頂きました。

ないなら話さない方がいい。」と言っていました。にわか勉強でポップスをかじった私は、時として的外れな話をすると、決まって言われました。

また、彼は大天才のようにいわれていますが、大変な努力家です。読めない楽譜をマスターし、弾けなかったギターもプロ並みの腕前となり、ドラムやベース、ピアノなども手掛けています。一時として無駄な時間はありませんでした。

最後に、職員会議をしているとも知らず、二人で廊下を歩きながら大声でビートルズをハモッていると、英語の先生に気合をかけられました。

その先生も、泉下の人となりました。彼はまたもその先生に気合をかけられているかな…。

道半ばで倒れ、本当に悔しかったことでしょう。大の親友のご冥福をお祈りします。

本稿を執筆してくださった佐々木諭さんは、平成27年1月28日、本誌の完成を前に、盟友を追いかけるかのように急逝されました。数日前に本稿の最終確認をしていただいたばかりでした。謹んでご冥福をお祈りいたします。